

## 子どもの抑うつ研究の概観

筑波大学大学院(博)心理学研究科 黒田 祐二

筑波大学心理学系 桜井 茂男

A review of childhood depression

Yuji Kuroda and Shigeo Sakurai (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

In recent years, research into childhood depression has continued to increase. This research has focused on the cognitive factors and behavioral factors for intra-personal vulnerability to childhood depression, and has investigated their effects on depression. In this paper, we review this research literature, highlighting some weaknesses and possible directions for future research. In particular, noting that the explanatory and predictive powers of cognitive and behavioral factors are not always sufficient, we consider the motivational approach to depression proposed by Sakurai (1995) and Dykman (1998) as a more powerful alternative. Although there have been few studies into the origins and development of vulnerability to depression, such research is important for the early prevention of depression.

**Key words:** childhood depression, cognitive and behavioral vulnerability to depression, motivational approach to depression, the origins and development of vulnerability, review.

ここ10数年の間、心理学において青年や成人を対象にした抑うつ研究が盛んに行われてきた。従来の抑うつ研究は、治療を目的とした経験的な臨床研究に限られていたが、近年の研究は、認知・社会心理学的概念を用いて実証的に抑うつ生起のメカニズムについて解明しようとするところにその特徴がある。

例えば、改訂学習性無力感理論(reformulated learned helplessness theory, 以下、改訂LH理論とする)(Abramson, Seligman & Teasdale, 1978; Metalsky, Abramson, Seligman, Semell & Peterson, 1982; Metalsky, Halberstadt & Abramson, 1987)は、社会心理学における原因帰属理論を応用して、抑うつの生起について説明しようとした理論である。また、認知の歪み理論(Beck, 1976)は、臨床経験から提唱された理論であるが、自己スキーマ(心の深層にある信念)などの認知的概念を用いて抑うつ生起のメカニズムを説明しようとしている。

これらの例をはじめとして、これまで青年・成人の抑うつに関する理論は数多く提唱され、それを検証する研究も数多く行われてきた。そのような中で、近年、子どもを対象にした抑うつ研究が増加しつつある。

1970年代までは、子どもの抑うつは存在しないという考え方が一般的であった(石坂・高木, 1987; 高野, 1995; 辻井・幸・本城, 1990)。当時、臨床領域で主流であった精神分析理論からすると、超自我の存在しない児童には抑うつは存在しない、と考えられたのである。すなわち、超自我の形成がなければ、自己に向けられた攻撃、罪悪感を引き起こす葛藤、そして現実自己と理想自己の間の不一致が生じないと考えられていた。

しかし、抑うつの診断基準や抑うつを測定する質問紙の開発、それらを用いた疫学的調査の結果から、確かに児童期にも抑うつが存在するという見解がとられるようになってきた(高野, 1995; 辻井・幸・

本城, 1990). 診断基準に関しては, Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders 3rd edition (DSM-III) (American Psychiatric Association, 1980)以降, 子どもの抑うつに対する基準が確立されている。質問紙に関しては, 成人の自己報告式尺度の子ども版が, Children's Depression Inventory (Kovacs, 1983; 以下, CDIとする)を代表にして10種類以上開発されている。自己報告式以外でも, 子どもの感情表現能力を考慮した行動評定や, 親・仲間による抑うつ評定尺度が開発されている (Kazdin, 1990)。

本邦においても, 近年, 子どもの抑うつが増加しつつあることが指摘されている。村田(1993)は, 臨床現場において抑うつ傾向を示す子どもが以前より多くなっていると報告している。名古屋大学医学部小児神経科の調査によると, 外来患者の中に占める抑うつの割合は, 1971年には1.5%でしかなかったが, 10年後には7.8%に増加したという(高野, 1995)。そして, 一般小学生・中学生を対象にした研究からも, 子どもの抑うつが広く蔓延していることが示されている。例えば, 村田(1993)は, CDIにより小・中学生の抑うつを検討したところ, 抑うつ傾向が強いとみなされるカット・オフ得点を越えている者の割合は, 小学生が13.3%(1041人中138人), 中学生が21.9%(543人中119人)であることが示されている。

このように子どもの中に抑うつが広く蔓延している状況を考えると, 本邦においても, 子どもの抑うつの発生メカニズムについて体系的に検討する必要があるといえよう。しかしながら, 本邦における子どもの抑うつ研究は, 欧米におけるそれと比べると非常に少ない。本邦における子どもの抑うつ研究の方向性を探るために, 欧米における研究を整理することが必要である。

欧米において子どもの抑うつの発生メカニズムを検討した心理学的研究を概観すると, 大きく2つの研究領域に分けられると考えられる。1つは, 子どもの個人内要因(原因帰属スタイル, 社会的スキルなどといった認知的, 行動的要因)が抑うつに及ぼす影響についての研究であり, もう1つは, 子どもを取り巻く環境要因(親子関係や友人関係の質など)が抑うつに及ぼす影響についての研究である。本論文では, 前者の領域について, 欧米における研究を中心に整理, 概観する。そして, そこでの問題点を指摘し, 今後の展望を述べ, 本邦における子どもの抑うつの発生メカニズムに関する研究の方向性を探ることにする。

本論文においては, 「抑うつ」を, 悲しみ・落ち込みなどの感情的側面, 自己評価の低下などの認知的

側面, 活動量や気力の低下といった行動的・動機づけの側面, そして食欲の低下や不眠などといった身体的側面から構成されるものとして定義する。そして, DSM-III, III-R, IVなどの臨床的な診断基準によって診断された, より重度の抑うつと, CDIなどの質問紙によって査定されたより軽度の抑うつの両方を含むものとする。また, 本論文における子どもとは, 児童期(6~11歳)から思春期(12~17歳)における子どもを指し, 高い抑うつの子どものみを「抑うつ児」, 低い抑うつの子どものみを「非抑うつ児」と呼ぶ。

本論文の構成は以下の通りである。まず, 子どもの抑うつ研究に適用・検討されている, 青年期・成人期における個人内要因の抑うつに及ぼす影響に関する理論を簡単に説明する。次に, 子どもの個人内要因の抑うつに及ぼす影響に関する研究を概観する。最後に, これらの研究の問題点と今後の方向性を述べ, 本邦における研究の方向性を探ることにする。

## I 青年期・成人期の抑うつ理論

子どもの抑うつ研究では, 青年期・成人期の抑うつ理論をそのまま適用する形で検討されていることが多い。青年期・成人期の抑うつ理論は複数あるが, 子どもの個人内要因と抑うつとの関係についての研究においては, 認知的理論(Abramson et al., 1978; Beck, 1976)と行動的理論(Coyne, 1976; Lewinsohn, 1974)が, 主に適用・検討されている。そこでまず, これらの理論について簡単に説明する(これらの理論の詳細については, 大芦・平井(1992), 坂本(1997), 高野(1995)を参照のこと)。

青年期・成人期の抑うつ研究においては, 抑うつ生起の予測において, これまで認知的理論が主要な役割を果たしてきた。認知的理論の代表的なものとして, 改訂LH理論(Abramson, Seligman & Teasdale, 1978; Metalsky, Halberstadt & Abramson, 1987; Metalsky, Abramson, Seligman, Semell & Peterson, 1982)と認知の歪み理論(Beck, 1976)がある。改訂LH理論や認知の歪み理論においては, 抑うつが生起する原因として, 抑うつに陥りやすくさせる認知的な素因を想定し, この認知的な素因が, ストレスフルな出来事が生じた時に活性化されて, 抑うつをもたらすと仮定する「素因ストレス仮説」を採用している。改訂LH理論においては, 認知的な素因として「抑うつの原因帰属スタイル」を取り上げている。抑うつの原因帰属スタイルとは, ネガティブな出来事(例えば, テストで悪い点を取った, 友達から仲間外れにされた)が生じた時,

その原因を、内的で(自分のせいであり)、安定的で(将来まで影響する安定した)、全般的な(その他の似たような場面にもあてはまる)要因(例えば、自分の能力や性格)に帰属しやすく、ポジティブな出来事(例えば、テストで良い点を取った、友達から遊びに誘われた)が生じた時には、その原因を外的で(環境のせいである)、不安定的で(一時的なものである)、特殊な(その場面だけにあてはまる)要因(例えば、運や相手の気分)に帰属しやすい認知傾向のことである。このような抑うつ的原因帰属スタイルは、ネガティブな(ストレスフルな)出来事が生じた時に活性化されやすく、その結果抑うつをもたらすとされる(素因ストレス仮説)。

また、認知の歪み理論においては、抑うつをもたらす認知として、「抑うつスキーマ」、「ネガティブな自動思考」、「体系的な推論の誤り」の3つを取り上げており、抑うつスキーマが認知的な素因とみなされている。抑うつスキーマとは、「誰からも愛されなければならない」といったように、「～しなければならない」などといった内容の信念のことである。抑うつスキーマは、ストレスフルな出来事(例えば、他者から拒否された)に遭遇した時に活性化されてネガティブな自動思考を引き起こし、その結果抑うつをもたらす、と仮定されている(素因ストレス仮説)。ネガティブな自動思考とは、自己・世界・未来に関するネガティブな内容をもつ思考(自分は価値がなく、世界は不公平で、将来は絶望的である)のことである。また、体系的な推論の誤りとは、明らかな証拠がないのに悲観的な推論をする(恣意的推論)、最も明らかなことには目もくれず、自分を否定的に評価する些細な情報に選択的に注意を向ける(選択的注目)、などといった偏った認知操作を意味しており、このような認知操作もネガティブな自動思考を生み出すと考えられている。

認知的理論が抑うつに陥りやすい素因として認知的要因に焦点を当てているのに対して、行動的理論は、抑うつに陥りやすい素因として行動的要因に焦点を当てている。Lewinsohn(1974)やCoyne(1976)の理論は、こういった行動的理論の1つである。Lewinsohn(1974)によれば、対人スキルが欠如していると、他者との親密な関係を構築することができず(従って対人関係において正の強化を得ることができず)、抑うつに陥るといふ。また、学業スキルが欠如していると、学業場面での失敗から(学業場面で正の強化をえることができず)、抑うつに陥るとされている。Coyne(1976)は、Lewinsohnのモデルを精緻化し、抑うつと対人行動の相互作用を強調して抑うつが悪化について理論化した。つま

り、抑うつ者は、確認を求める行動傾向(reassurance seeking;相手の自分に対する誠意を疑って、自分のことをどれだけ心から思ってくれているのか、受け入れてくれるのか、を確かめる行動;勝谷, 2000)が多く、その結果相手からの拒絶を引き起こし、抑うつを悪化させるといふ。LewinsohnとCoyneの理論は、子どもの抑うつ研究においては、主に対人スキルやコンピテンスの観点から検討されている。

## II 子どもの抑うつと関係する認知的、行動的要因

次に、子どもにおける個人内要因と抑うつとの関係についての研究を整理する。これまでの研究において、個人内要因としては主にIで述べた認知的要因と行動的要因が取り上げられている。以下に、これら2つの個人内要因と抑うつとの関係がどのようになっているかを整理、概観する。

### 1. 認知的要因

#### 1) 自己認知スタイルと抑うつとの関係

欧米における研究から、これまで、原因帰属スタイル、抑うつスキーマ、ネガティブな自動思考、体系的な推論の誤りなどの自己認知スタイルと抑うつとの関係が検討されている。

改訂LH理論の予測する原因帰属スタイルと抑うつとの関係は、多くの研究において横断的検討がなされている。それらを概観すると、理論を支持する結果(Gotlib, Lewinsohn, Seeley, Rohde & Redner, 1993;Hops, Lewinsohn, Andrew & Roberts, 1990; Kaslow, Rehm, Pollack & Siegel, 1988; Kaslow, Rehm & Siegel, 1984)と、支持しない結果(MacCauley, Mitchel, Burke & Moss, 1988; Robins & Hinkley, 1989)が報告されている。MacCauley et al. (1988)の研究においては、ネガティブな出来事における抑うつの原因帰属スタイルが抑うつ児にみられないことが示されており、Robins & Hinkley(1989)の研究においては、ネガティブ及びポジティブな出来事の、内的・外的次元及び全般・特殊次元への原因帰属が、抑うつと関連しないことが示されている。

本邦においても、桜井(1991, 1995)が小学5・6年生を対象にして原因帰属スタイルと抑うつとの関係を検討している。桜井による2つの研究においては、共通して得られた結果は、学業達成場面においては、成功に対する努力への原因帰属と抑うつとの負の相関、そして、成功に対する運への原因帰属、及び、失敗に対する能力、体調・気分、課題、運への原因帰属と抑うつとの正の相関であった。また、対

人関係場面においては、成功に対する運への原因帰属、及び、失敗に対する性格、運への原因帰属と抑うつとの正の相関が共通して見出された結果であった。これらの結果から、本邦においては、改訂LH理論は、子どもにおいて部分的に支持されたといえる。

改訂LH理論における素因ストレス仮説を検証するために、いくつかの縦断的研究も行われている。その結果、一方では、子どもの抑うつ原因帰属スタイルとストレスフルな出来事が交互作用して後の抑うつの変化を予測することが(Hilsman & Garber, 1995; Nolen-Hoeksema, Girgus & Seligman, 1986, 1992)、他方では、抑うつ原因帰属スタイルとストレスフルな出来事がそれぞれ抑うつ状態の変化を予測するもの、両者が交互作用しないことが(Cole & Turner, 1993; Hammen, Adrian & Hiroto, 1988)示されている。

認知の歪み理論の仮定する抑うつスキーマ、ネガティブな自動思考、そして体系的な推論の誤りと抑うつとの関係についてもいくつか検討されている。抑うつスキーマについては、それを直接的に測定して抑うつとの関係を検討した研究はほとんどみあたらないが、類似した概念である自尊心や自己価値と抑うつとの間には負の相関が示されている(Lewinsohn, Gotlib & Seely, 1997; McCauley, Michell, Burke & Moss, 1988; McGee, Anderson, Williams & Silva, 1986; 村田, 1993)。そして、ネガティブな自動思考に関しては、非抑うつ児より抑うつ児において顕著にみられることが示されている(Laurent & Stark, 1993)。最後に、体系的な推論の誤りについては、非抑うつ児より抑うつ児の方が偏った推論をしやすい(Leitenberg, Yost & Carroll-Wilson, 1986)が、それは対人場面に限定されており(Robins & Hinkley, 1989)、抑うつ以外の問題にもあてはまる(Leitenberg, Yost & Carroll-Wilson, 1986)ことも報告されている。

その他、統制感や非随伴性の知覚などといった自己認知と抑うつとの関係についても、子どもを対象に検討されている(Cole & Rehm, 1986; Weisz, Sweeny, Proffitt & Carr, 1993)。

## 2) 対人認知スタイルと抑うつとの関係

従来、認知スタイルと抑うつとの関係についての研究においては、主に自己認知スタイルが取り上げられてきた。これに対して、近年では、認知スタイルとして対人認知スタイルも取り上げられ、それが抑うつとどのように関係するかについて検討されはじめている。これらの研究では、対人認知スタイルとして、対人スキーマや、対人相互作用の解釈など

が取り上げられている。

対人スキーマと抑うつとの関係については、児童を対象に Rudolph, Hammen & Burge(1997)が検討を行っている。Rudolph et al.(1997)は、対人スキーマを、「自己と家族及び仲間との関係についての知覚」、「対人場面における家族や仲間の自分に対する行動についての期待」、「対人情報のスキーマ処理」として定義し、抑うつとの関係を検討した。その結果、抑うつ児は、非抑うつ児より、ネガティブな対人スキーマをもつ(「母親や仲間は自分に受容的に接してくれない」、「困った時にサポートを与えてくれない」という認知表象をもち、偶発再生課題において母親のネガティブな特性を多く再生する)ことが明らかにされている。また、共分散構造分析により、対人スキーマが抑うつの原因であるか結果であるかを検討したところ、「仲間との関係についてのネガティブなスキーマが直接的に抑うつをもたらす」及び「仲間との関係のネガティブなスキーマが、仲間からの拒否を引き起こし、仲間からの拒否が抑うつをもたらす」という結果が示された。同時に、「抑うつ→親との関係についてのネガティブなスキーマ及び仲間との関係についてのネガティブなスキーマ」という結果も示された。

対人相互作用の解釈に関しては、これまでの研究から、抑うつ児は非抑うつ児より他者との相互作用をネガティブに解釈する傾向があることが示されている。Quiggle, Garber, Panak & Dodge(1992)の児童を対象とした研究から、抑うつ児は攻撃性の高い児童と同様に、自分に対する他児の拒否的な行動に敵対的な意図があると認知するが、攻撃性の高い児童とは異なって、その敵対的な意図の原因を内的、安定的、全般的な要因に帰属することが示されている。また、Shirk, Horn & Leber(1997)の児童期・思春期の子どもを対象とした研究から、母親からのサポートを評価する際、抑うつ児は、母親が自分をサポートしてくれているわけではないとネガティブに解釈することが見出されている。さらに、Baker, Milich & Manolis(1996)の研究(対象は思春期の女子)から、抑うつ児は非抑うつ児と比べると、自分と相手との相互作用について、パートナーが批判的である、自分の課題遂行は劣っている、などと解釈することが示されている。この研究では、抑うつ児のパートナーは、抑うつ児を拒絶し、同時にお互いの相互作用を否定的に評価し、相互作用中に悲しく、親しみのない、受動的な非言語的行動を示すという結果も得られており、抑うつ児の相互作用の解釈は正確であることが示唆される。

以上の研究から、抑うつ児の対人認知スタイル

は、自己認知スタイルと同様に、ネガティブに偏ったものであることがわかる。しかしながら、ネガティブな対人認知スタイルが、抑うつの原因であるか結果であるかについては、不明瞭なところが多く、今後の検討課題である。

## 2. 行動的要因

### 1) 対人スキルと抑うつとの関係

様々なスキルの不足が抑うつと関係していると考えられる。これまでに、対人スキルの不足と抑うつとの関係が数多く報告されている。抑うつとの行動的理論(Coyne, 1976; Lewinsohn, 1974)によると、対人スキルが欠如していると対人関係において正の強化を得られず、抑うつに陥るといふ。

抑うつ青年と同様に、抑うつ児も、対人関係、つまり親や仲間との相互作用の中で、様々な不適応的行動を示す。抑うつ児は、非抑うつ児と比べると仲間と相互作用をすることが少なく、引きこもりがちで、一人でいる時間が多い(Altman & Gotlib, 1988; Kazdin, Esvedt-Dawson, Sherick & Colbus, 1985; Straus, Forehand, Frame & Smith, 1984)。一方で、仲間に対して攻撃的で敵対的でもある(Altman & Gotlib, 1988)。

対人相互作用の中での抑うつ児の不適応な反応は、対人葛藤解決課題においても検討されている。Rudolph, Hammen & Burge(1994)の研究から、仲間との対立事態(例えば、「あなたが並んでいるところへ、別の子が割り込みしてきました」)の解決において、抑うつ児は、非抑うつ児より、敵対的な解決方法を選び、主張的・友好的な解決方法を選ばないことが示された。そして、仲間との対立事態を第三者が観察した結果、抑うつ児は非抑うつ児より対立を解決しようとする持続性が欠如していたり、対立を悪化させたりすることが見出された。他方、受動的・引きこもりのな解決方法に関しては、両群に差がみられず、また、対人葛藤場面での目的達成の手段を産出した数や、意味のない葛藤解決方略の数に関しては、抑うつとはほとんど相関がないことも見出されている(Doerfler, Mullins, Griffin, Siegel & Richards, 1984; Mullins, Siegel & Hodges, 1985)。

不適応的な対人葛藤解決方略と抑うつとの関係については、以下の2つの仮説が考えられている。すなわち、(1)対人ストレス(対人葛藤など)が生じた時適切な対処方略がとれないために抑うつが生じる(素因ストレス仮説; Nezu & Ronan, 1988)。 (2)抑うつが不適応的な対人葛藤解決方略を引き起こし、その不適応的な対人葛藤解決方略は対人ストレスを引き起こす。そして、その対人ストレスは最初の抑

うつを悪化させる(ストレス生成仮説; stress generation hypothesis; Hammen, 1991)。

Davila, Hammen, Burge, Paley & Daley(1995)は、縦断的研究により両仮説を検討した。対象者は思春期後期の女子であった。その結果、素因ストレス仮説については検証されなかった。そして、不適応的な対人葛藤解決方略(何が問題となっているかを同定する能力、解決方略を生成する能力、及び、方略実行の結果を予想する能力の欠如)と最初の抑うつがそれぞれ、他者との対立や関係の崩壊といった対人ストレスを引き起こし、対人ストレスが1年後の高い抑うつをもたらすことが示された。しかし、最初の抑うつが不適応的な対人葛藤方略をもたらすことは示されなかった。Hammen(1991)のストレス生成仮説は、素因ストレス仮説のように、ストレスフルな出来事がどのような原因であれ起こってしまったものと仮定して、そのストレスフルな出来事に対する不適応的な認知や方略が抑うつをもたらすと考えるのではない。抑うつを発症させたり維持させたりする人というのは、そのストレスフルな対人関係での出来事を、不適切な対人葛藤方略によって自ら引き起こし、それによって自滅的に抑うつを発症・維持させている、と予測している。この点が興味深い。Davila et al.(1995)の研究においては、対人葛藤解決における行動的側面(例えば、攻撃する、引きこもる、などといった葛藤対処方略)でなく、認知的側面(問題の所在を考えたり方略を生成したりする能力)を取り上げているが、今後は行動的側面も取り上げてストレス生成仮説を検討する必要がある。

本邦においても、今津(1998)が、女子中学生を対象に、対人スキル、対人ストレス、抑うつとの関係を検討している。共分散構造分析の結果、対人スキルの欠如と友人関係ストレスは抑うつに先行する可能性があること、そして、共感的行動スキルの欠如は友人関係ストレスを媒介して抑うつをもたらす、積極的行動スキルの欠如は直接的に抑うつをもたらすことが明らかにされている。今津(1998)の研究は、対人葛藤場面における方略以外でも、共感的行動の欠如などといった日常の不適切な対人行動が対人ストレスを引き起こすことを示唆している。

対人スキルと比べて、学業スキル(学業方略・学習行動)と、学業場面での失敗及び抑うつとの関係は、あまり検討されていない。今後は、学業場面におけるスキルにも焦点をあて、検討を加える必要がある。

### 2) コンピテンスと抑うつとの関係

コンピテンスと抑うつとの関係については、対人

及び学業領域におけるコンピテンスが抑うつと関係することが示されている。すなわち、抑うつ児は、自分の対人場面における有能さや学業に対する有能さについてネガティブに認知していることが示されている (Altman & Gotlib, 1988; Harter, Marold & Whitesell, 1992; Weisz et al., 1993)。

上述の研究では、コンピテンスを被調査児に自己報告させているため、実際に抑うつ児のコンピテンスが低いかどうかは分からないが、仲間、親、教師による第三者からの評定でも、抑うつ児は対人場面で有能に振舞うことができないことが示されている (Buhmester, 1990; Fauber, Forehand, Long, Burke & Faust, 1987)。また、実際の学業成績、アナグラム課題や知覚運動課題においても、抑うつ児は低い遂行を示すことが見いだされている (Kaslow et al., 1984; Mullins et al., 1985; Sacco & Graves, 1984; Strauss et al., 1984)。

Cole (1990, 1991) は、複数の領域における低いコンピテンスが抑うつに累積的に影響するが、特定の領域において高いコンピテンスをもつことは、他の領域における低いコンピテンスが抑うつに与える否定的な影響を補うという仮説を提唱している。この仮説の検証として、Cole (1990, 1991) は、対人・学業の両方の領域でコンピテンスが低い子どもは最も高い抑うつ徴候を示し、次いでいずれか一方の領域においてコンピテンスが低い子どもにおいて抑うつが高く、両方の領域でコンピテンスの高い子どもは抑うつを示さないことを見いだしている。また、いずれか一方の領域でコンピテンスの低い場合は、学業領域におけるコンピテンスの低さよりも、対人領域におけるコンピテンスの低さの方が、抑うつに与える影響が大きいことが示されている (Cole, 1991; Cole, Martin, Powers & Truglio, 1996)。

コンピテンスと抑うつとの関係について、低いコンピテンスが抑うつの原因であるか、結果であるか、という因果関係の方向性が問題となる。この点に関して Cole et al. (1996) は、小学3年生及び6年生を対象にして、コンピテンスを被験児、仲間、教師、親に評定させ、縦断的研究によって検討している。共分散構造分析の結果から、6年生において、「低い対人コンピテンス→抑うつ」という関係が支持され、「抑うつ→低い対人コンピテンス」という関係は支持されなかった。この結果は、6年生においては、対人コンピテンスの低さは抑うつの結果ではなく原因である、ということを示している。しかし、3年生における対人コンピテンスと抑うつとの関係と、学業コンピテンスと抑うつとの関係に関しては、いずれの因果関係も支持されなかった。

### Ⅲ 問題点と今後の方向

#### 1. 抑うつ生起のメカニズムにおいて動機づけ的要因を考慮する重要性

上述してきた通り、子どもを対象とした抑うつ心理学的研究においては、抑うつをもたらす素因として、これまで認知的要因と行動的要因が取り上げられてきた。しかしながら、先行研究を概観すると、認知的要因だけでは、子どもの抑うつ生起を必ずしも十分に予測・説明できていないわけではない。また、行動的要因に関しては、何故そのような不適応的な行動が生じるのか、が明らかにされていない。従って、認知的要因と行動的要因以外に、別の要因も踏まえて、子どもの抑うつ生起のメカニズムを詳細に検討する必要がある。

近年、桜井 (1995) は、抑うつ研究において主要な役割を果たしてきた改訂 LH 理論だけでは、抑うつ生起を予測するには不十分であるとして、目標理論と原因帰属理論を統合した抑うつ理論を提唱している。桜井 (1995) は、Ames & Archer (1988) や Dweck & Leggett (1988) の目標理論を基に、原因帰属に影響を与える目標として、熟達目標 (新しいスキルを獲得することに関心があり、学習の過程に価値をおき、達成が努力に依存する目標) と成績目標 (能力があると言われることに関心があり、成功すること、他人よりも成績が良いこと、ほとんど努力しないことで成功することによって能力の証明をしようとする目標) を考えている。熟達目標をもつと、努力することが達成につながるため、学習場面における失敗の原因は主に努力不足 (不安定次元の要因) に帰属され、抑うつや無気力に陥りにくいという。一方、成績目標をもつと、自分の能力に頼着するようになるため、学業場面での失敗の原因は能力不足 (安定的次元の要因) に帰属され、抑うつや無気力に陥りやすくなる、と仮定している。桜井 (1995) は、この理論を検討した結果、熟達目標 (楽しいから勉強するなどといった興味による学習理由) が、学業場面における失敗に対する能力不足への原因帰属を抑制し、成功に対する努力への原因帰属を促進すること、そして、成績目標 (先生に叱られたくないからなどといった対人的な学習理由) が、失敗に対する能力不足への原因帰属を促進し、能力不足への原因帰属が抑うつを促進すること、を見出している。

Dykman (1998) も、動機づけ的要因を抑うつ素因と考えるモデルによって、抑うつ説明力が高まると指摘している。彼は、従来の抑うつ研究と臨床的知見を概観する中で、抑うつに陥りやすい者は、

抑うつのみならず、批判や拒否に対する感受性、予期不安、自己意識過剰といった特徴も同時に示すことを指摘している。そして、こういった様々な特徴は、既存の認知的アプローチでは説明できない、と批判している。

先述したように、多くの認知的アプローチは、抑うつがどのようにして生じるかに関して、抑うつ時の認知的素因が何らかのストレスフルな出来事に遭遇した時にはじめて活性化されて、ネガティブな認知（例えば「自分はダメな人間だ」といった認知）を引き起こし、最終的に抑うつをもたらすとされている。この仮説においては、認知的素因はネガティブな出来事が生じるまで心の深層に潜んでいて、個人の心理的活動には何ら影響を及ぼさないとされている。このような認知的素因では、抑うつ者がしばしば感じるネガティブな出来事前の徴候（つまり、批判・拒否に対する感受性や予期不安などといった心理的活動）について説明することはできない。

Dykman は、このような認知的アプローチの問題点を補うためには、抑うつ時の素因として、ネガティブな出来事が生じる前にも抑うつ者の心理的活動に「活発に」(active or "in motion") 影響を及ぼすような要因、すなわち、動機づけ的な要因である目標 (Dweck & Leggett, 1988) を考慮する必要性を主張している。

Dykman (1998) も、桜井 (1995) と同様に、抑うつ生起のメカニズムにおける動機づけ的要因と認知的要因の統合を試みている。すなわち、抑うつ時の素因としての目標 (自己価値を証明しようとする目標) は、ストレスフルな出来事が生じた時、「自分は価値がない」という認知を引き起こし、抑うつをもたらすとする仮説 (素因ストレス仮説) を提唱している。

さらに、Dykman (1998) は、目標が、他者からの拒絶や抑うつ生起をもたらすような行動を引き起こす可能性を示唆している。すなわち、自己価値を証明しようとする目標の高い者は、対人関係において、確認を求める行動傾向を引き起こし、その結果、他者からの拒絶を自ら生じさせる (ストレス生成仮説) かもしれない、としている。

このように、動機づけ的要因を抑うつ時の素因と考えることにより、ストレスや抑うつをもたらす不適応的な行動が何故生じるのか、を説明することも可能になり、抑うつ生起までの認知的プロセスと行動のプロセスの両方を説明できるようになる。

以上を考慮すると、目標や他の動機づけ的要因 (例えば、完全主義) の観点から、抑うつ生起について検討していくことは有用であると考えられる。しか

しながら、子どもの動機づけ的要因と抑うつとの関係についての研究は、国内外を問わずこれまでのところ少ない。今後の発展が望まれるところである。

## 2. 抑うつ研究における発達の視点の必要性

これまでみてきたように、児童期・思春期の抑うつは、青年期・成人期の抑うつモデルをそのまま適用する形で検討されてきた。しかしながら、青年・成人の抑うつモデルに関して、Hammen (1992) は、次のように批判している。つまり、青年・成人の抑うつモデルにおいては、抑うつをもたらすと仮定されている認知的・行動的素因がいつ頃から抑うつ時の発症に影響を及ぼすようになるのか、そして、その素因の起源がどこにあり、それらがどのように発達してくるのか、が明確にされていない。

実際、発達心理学における多くの知見から、青年・成人と子どもの認知的構造や機能、行動傾向、そして、動機づけ傾向は異なっているということは明らかであり、青年期以降において抑うつに影響すると考えられている認知的構造・機能、行動傾向、動機づけ傾向が、それらの発達していない年齢段階の子どもにおいては、抑うつ時の生起に影響を及ぼさないことも考えられる。

このような指摘に対して、いくつかの研究が参考になる。Turner & Cole (1994) の研究はその1つである。Turner & Cole の研究から、小学4年生・6年生では、原因帰属スタイルとストレスフルな出来事が交互作用して抑うつを予測することはないが、中学2年では両者が交互作用して抑うつを予測することが示された。また、Nolen-Hoeksema, Girgus & Seligman (1992) は、原因帰属スタイル、ストレス、抑うつとの関係について、5年にわたる縦断的研究を行っている。その結果、小学3・4年においてはストレスフルな出来事のみしか抑うつを予測しないが、小学5・6年になると原因帰属スタイルもしくは原因帰属スタイルとストレスの交互作用が抑うつを予測するようになることが見いだされている。これらの研究から、原因帰属スタイルがストレスと交互作用して抑うつに影響を及ぼすようになるのは、小学5年から中学2年にかけてであろうと示唆される。

また、抑うつ時の素因の起源がどこにあるか、そして、それがどのように発達してくるのか、を特定することは、子どもの抑うつ時の予防方法を考える際に大きな貢献をもたらすと考えられる。抑うつ時の素因の起源に関しては、子どもの抑うつに影響する環境要因 (例えば、親の子どもに対するしつけやコミュニケーションの仕方などといった親子関係の質) に

関する研究から示唆を得ることができるであろう。本邦においてこのような研究は少なく、今後の発展が望まれる。また、抑うつ素因の発達に関しては、近年、いくつかの仮説が提唱されている(Cole, 1990; Rose & Abramson, 1992)が、十分な実証的研究が行われているとはいえ、今後の課題である。

子どもの抑うつを研究することは、青年期以降の抑うつ研究であまり問題にされてこなかった、抑うつ素因の認知的、行動的、動機づけ素因の起源がどこにあり、どのように発達し、いつ頃から抑うつ素因の生起に影響するようになるのか、を明らかにすることを可能にする。その意味で、子どもを対象とした発達的な視点からの抑うつ研究は、抑うつ研究全体において大きな意義をもつと考えられる。

### 引用文献

- Abramson, L.Y., Seligman, M.E.P. & Teasdale, J.D. 1978 Learned helplessness: Critique and reformulation. *Journal of Abnormal Psychology*, **87**, 49-74.
- Altman, E.O. & Gotlib, I.H. 1988 The social behavior of depressed children: An observational study. *Journal of Abnormal Child Psychology*, **16**, 29-44.
- American Psychiatric Association 1980 Diagnostic and statistics manual of mental disorders (3rd ed.) APA: Washington, D.C.
- Ames, C. & Archer, J. 1988 Achievement goal in the classroom: Students' learning strategies and motivation processes. *Journal of Educational Psychology*, **80**, 260-267.
- Baker, M., Milich, R. & Manolis, M.B. 1996 Peer interactions of dysphoric adolescents. *Journal of Abnormal Psychology*, **24**, 241-255.
- Beck, A.T. 1976 Cognitive therapy and the emotional disorders. New York: International University Press.
- Buhrmester, D. 1990 Intimacy of friendship, interpersonal competence, and adjustment during pre-adolescence and adolescence. *Child Development*, **61**, 1101-1111.
- Cole, D.A. 1990 Relation of social and academic competence to depressive symptoms in childhood. *Journal of Abnormal Psychology*, **99**, 422-429.
- Cole, D.A. 1991 Change in self-perceived competence as a function of peer and teacher evaluation. *Developmental Psychology*, **27**, 682-688.
- Cole, D.A., Martin, J.M., Powers, B. & Truglio, R. 1996 Modeling causal relations between academic and social competence and depression: A multitrait-multimethod longitudinal study of children. *Journal of Abnormal Psychology*, **105**, 258-270.
- Cole, D.A. & Rehm, L.P. 1986 Family interaction patterns and childhood depression. *Journal of Abnormal Child Psychology*, **14**, 297-314.
- Cole, D.A. & Turner, Jr., J.E. 1993 Models of cognitive mediation and moderation in child depression. *Journal of Abnormal Psychology*, **102**, 271-281.
- Coyne, J.C. 1976 Depression and the response of others. *Journal of Abnormal Psychology*, **85**, 186-193.
- Davila, J., Hammen, C., Burge, D., Paley, B. & Daley, S.E. 1995 Poor interpersonal problem solving as a mechanism of stress generation in depression among adolescent women. *Journal of Abnormal Psychology*, **104**, 592-600.
- Doerfler, L.A., Mullins, L.L., Griffin, N.J., Siegel, I.J. & Richards, C.S. 1984 Problem-solving deficits in depressed children, adolescents, and adults. *Cognitive Therapy & Research*, **8**, 489-500.
- Dweck, C.S. & Leggett, E.L. 1988 A social-cognitive approach to motivation and personality. *Psychological Review*, **95**, 256-273.
- Dykman, B.M. 1998 Integrating cognitive and motivational factors in depression: Initial test of a goal-orientation approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 139-158.
- Fauber, R., Forehand, R., Long, N., Burke, M. & Faust, J. 1987 The relationships of young adolescent children's depression inventory (CDI) scores to their social and cognitive functioning. *Journal of Psychopathology and Behavior Assessment*, **9**, 161-172.
- Gotlib, I.H., Lewinsohn, P.M., Seeley, J.R., Rohde P. & Redner, J.E. 1993 Negative cognition and attributional style in depressed adolescents: An examination of stability and specificity. *Journal of Abnormal Psychology*, **102**, 607-615.
- Hammen, C. 1991 Generation of stress in the course of unipolar depression. *Journal of Abnormal Psychology*, **100**, 555-561.
- Hammen, C. 1992 Cognitive, life stress, and interpersonal approaches to a developmental psycho-

- pathology model of depression. *Development and Psychopathology*, **4**, 189-206.
- Hammen, C., Adrian, C. & Hiroto, D. 1988 A longitudinal test of the attributional vulnerability model in children at risk for depression. *British Journal of Clinical Psychology*, **27**, 37-46.
- Hammen, C. & Zupan, B.A. 1984 Self-schemas, depression, and the processing of personal information in children. *Journal of Experimental Child Psychology*, **37**, 598-608.
- Harter, S., Marold, D.B. & Whitesell, N.R. 1992 Model of psychosocial risk factors leading to suicidal ideation in young adolescents. *Development and Psychopathology*, **4**, 167-188.
- Hilsman, R. & Garber, J. 1995 A test of the cognitive diathesis-stress model of depression in children: Academic stressors, attributional style, perceived competence, and control. *Journal of Personality and Social Psychology*, **69**, 370-380.
- Hops, H., Lewinsohn, P.M., Andrew, J.A. & Roberts, R.E. 1990 Psychosocial correlates of depressive symptomatology among high school students. *Journal of Clinical Child Psychology*, **3**, 211-220.
- 今津芳恵 1998 社会的スキルの欠如が抑うつに及ぼす影響—女子中学生を対象とした場合— 日本心理学会第62回大会発表論文集, 922.
- 石坂好樹・高木隆郎 1987 幼児のうつ状態 臨床精神医学, **16**, 701-708.
- Kaslow, N.J., Rehm, N.P., Pollack, S.L. & Siegel, A.W. 1988 Attributional style and self-control behavior in depressed and nondepressed children and their parents. *Journal of Abnormal Child Psychology*, **16**, 163-175.
- Kaslow, N.J., Rehm, N.P. & Siegel, A.W. 1984 Social-cognitive and cognitive correlates of depression in children. *Journal of Abnormal Child Psychology*, **12**, 605-620.
- 勝谷紀子 2000 抑うつ傾向および確認を求める傾向が自己関連情報収集行動および自己呈示に及ぼす影響 日本心理学会第64回大会論文集, 894.
- Kazdin, A.E. 1990 Childhood depression. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, **31**, 121-160.
- Kazdin, A.E., Esvedt-Dawson, K., Sherick, R.B. & Colbus, D. 1985 Assessment of overt behavior and childhood depression among psychiatrically disturbed children *Journal of Consulting & Clinical Psychology*, **53**, 201-210.
- Kovacs, M. 1983 *The children's depression inventory: A self-rated depression scale for school-aged youngsters*, Unpublished manuscript, University of Pittsburgh.
- Laurent, J. & Stark, K.D. 1993 Testing the cognitive content-specificity hypothesis with anxious and depressed youngsters. *Journal of Abnormal Psychology*, **102**, 226-237.
- Leitenberg, H., Yost, L.W. & Carroll-Wilson, M. 1986 Negative cognitive errors in children: Questionnaire development, normative data, and comparisons between children with and without self-reported symptoms of depression, low self-esteem, and evaluation anxiety. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **54**, 528-536.
- Lewinsohn, P.M. 1974 A behavioral approach to depression. In R. Friedman & M. Katz (Eds.), *The psychology of depression: Contemporary theory and research*. Pp157-185. Washington, DC: Winston-Wiley.
- Lewinsohn, P.M., Gotlib, I.H. & Seely, J.R. 1997 Depression-related psychosocial variables: Are they specific to depression in adolescents? *Journal of Abnormal Psychology*, **106**, 365-375.
- McCauley, E., Michell, J.R., Burke, P. & Moss, S. 1988 Cognitive attributes of depression in children and adolescents. *Journal of Consulting & Clinical Psychology*, **56**, 903-908.
- McGee, R., Anderson, J., Williams, S. & Silva, P.A. 1986 Cognitive correlates of depressive symptoms in 11-year-old children. *Journal of Abnormal Child Psychology*, **14**, 517-524.
- Metalsky, G.I., Abramson, L.Y., Seligman, M.E.P., Semmel, A. & Peterson, C. 1982 Attributional styles and life events in the classroom: Vulnerability and invulnerability to depressive mood reactions. *Journal of Personality and Social Psychology*, **43**, 612-617.
- Metalsky, G.I., Halberstadt, L.J. & Abramson, L.Y. 1987 Vulnerability to depressive mood reactions: Toward a more powerful test of the diathesis-stress and causal mediation components of the reformulated theory of depression. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 386-393.
- Mullins, L.L., Siegel, I.J. & Hodges, K. 1985 Cognitive problem-solving and life event correlates of depressive symptoms in children. *Journal of Abnormal Child Psychology*, **13**, 305-314.

- 村田 豊 1993 小児期のうつ病 臨床精神医学, **22**, 557-563.
- Nezu, A.M. & Ronan, G.F. 1988 Social problem solving as a moderator of stress-related depressive symptoms: A prospective analysis. *Journal of Counseling Psychology*, **35**, 134-138.
- Nolen-Hoeksema, S., Girgus, J.S. & Seligman, M.E.P. 1992 Predictors and consequences of childhood depressive symptoms: A 5-year longitudinal study. *Journal of Abnormal Psychology*, **101**, 405-422.
- Nolen-Hoeksema, S., Girgus, J.S. & Seligman, M.E.P. 1986 Learned helplessness in children: A longitudinal study of depression, achievement, and explanatory style. *Journal of Personality and Social Psychology*, **51**, 435-442.
- 大芦 治・平井 久 1992 学習性無力感に関する帰属理論についての研究 心理学評論, **35**, 175-200.
- Quiggle, N.L., Garber, J., Panak, W.F. & Dodge, K.A. 1992 Social information processing in aggressive and depressed children. *Child Development*, **63**, 1305-1320.
- Robins, C.J. & Hinkley, K. 1989 Social-cognitive processing and depressive symptoms in children: A comparison of measures. *Journal of Abnormal Child Psychology*, **17**, 29-36.
- Rose, D.T. & Abramson, L.Y. 1992 Developmental predictors of depressive cognitive style: Research and theory. In D. Cicchetti & S.L. Toth (Eds.), Rochester symposium on developmental psychopathology. Vol.4. Developmental perspectives on depression. University of Rochester Press. Pp.323-350.
- Rudolph, K.D., Hammen, C. & Burge, D. 1994 Interpersonal functioning and depressive symptoms in childhood: Addressing the issues of specificity and comorbidity. *Journal of Abnormal Child Psychology*, **22**, 355-371.
- Rudolph, K.D., Hammen, C. & Burge, D. 1997 A cognitive-interpersonal approach to depressive symptoms in preadolescent children. *Journal of Abnormal Child Psychology*, **25**, 33-45.
- Sacco, W.P. & Graves, D.J. 1984 Childhood depression, interpersonal problem-solving, and self-ratings of performance. *Journal of Clinical Child Psychology*, **13**, 10-15.
- 坂本真士 1997 自己注目と抑うつの社会心理学 東京大学出版会
- 桜井茂男 1991 児童における抑うつ傾向と原因帰属様式との関係 健康心理学研究, **4**, 23-30.
- 桜井茂男 1995 無気力の教育社会心理学 風間書房
- Shirk, S.R., Horn, M.V. & Leber, D. 1997 Dysphoria and children's processing of supportive interactions. *Journal of Abnormal Child Psychology*, **25**, 239-249
- Strauss, C.C., Forehand, R., Frame, C. & Smith, K. 1984 Characteristics of children with extreme scores on the children's depression inventory. *Journal of Clinical Child Psychology*, **13**, 227-231.
- 高野清純 1995 感情の発達と障害 福村出版
- 辻井正次・幸 順子・本城秀次 1990 児童・思春期の抑うつ状態に関する研究—健常児童を対象として— 名古屋大学教育心理学紀要, **37**, 129-139.
- Turner, Jr., J.E. & Cole, D.A. 1994 Developmental differences in cognitive diatheses for child depression. *Journal of Abnormal Child Psychology*, **22**, 15-32.
- Weisz, J.R., Sweeny, L., Proffitt, V. & Carr, T. 1993 Control-related beliefs and self-reported depressive symptoms in late childhood. *Journal of Abnormal Psychology*, **102**, 411-418.